

音楽のおくりもの Information

# Spire\_M

小学校版  
通巻第25号

p.2

日本の伝統文化を学ぼう

p.6

和楽器を使う

授業のコーディネート

作曲家 眼龍 義治

p.10

「音楽の真実」を求めて

一時空を越えるウィーン旅行記

横浜国立大学 茂木 一衛

p.14

低学年～中学年から歌唱で使える

「歌声1・2・3!」

仙台市立金剛沢小学校 大槻 葉子

p.16

ガクリョク  
楽力(学力)アップ♪

充実した鑑賞指導を目指して

—基本的な考え方と教材研究のポイント—(後編)

福岡教育大学 木村 次宏



# 日本の伝統芸能を学ぼう



## 公益財団法人 梅若研能会の主催による 《夏休み親と子の能楽教室》

この能楽教室は、夏休みに親子で「事前学習」と「能楽鑑賞」の2日間にわたって参加する催しです。「事前学習」（保護者は別の部屋で）では、講師が鑑賞のマナーをはじめ、能楽のさまざまな魅力をビデオや教材を使用して、わかりやすく説明していただけます。また、能楽の音、リズムなどを体感するワークショップも同時に行われます。そして、「能楽鑑賞」（保護者と別席）は『国立能楽堂』で鑑賞することができます。

※参加対象は、原則として4歳から中学生。

## ～アプローチ～

「お能」は謡曲（うたい）という台本によって謡いながら舞う歌舞伎劇の一種です。650年も昔の室町時代にできたのですが、その台本は今もちゃんと残っており、文学作品としても大変すぐれたものです。能や狂言の数え方は、普通一曲、二曲とか、一番、二番と数えます。現在演じられている能の数はだいたい240曲ぐらいあります。今回、「わたしたちの能楽教室」では、狂言一番と能一番を鑑賞します。江戸時代、能や狂言は、武士たちの節目の儀式で人が集まった時や、よそから来た大事なお客様をもてなす際に式楽として、一日に能五番と狂言四番を組み合わせた番組で演じられました。この時、能の演者たちは、どういう曲をどんな順序で舞うかを考え、シテ（主人公）の役柄によって「神・男・女・狂・鬼」の順に演じるようになりました。そして狂言を、能と能の間で演じ、これが、正式な演能の形式となりました。面白いお話が多い劇「狂言」と、まじめなお話が多い劇「能」は、全く性格が違うのに同じ舞台上で演じられます。それは、能や狂言ができた歴史と関係があります。・・・中略

今回、私たちが鑑賞する三番目物の能の一つ「羽衣」では、月に住む天女の美しい舞を観ますが、天人のつける装束はどのようなものなのでしょう。能は「能面」という面をかける仮面劇でもありますが、どのような面を用いるのでしょうか。ここで「羽衣」で使用する能面や装束についてお勉強してみましょう。女性の役がかける代表的な能面を若い順から見ると「小面」「若女」「増女」「深井」「姥」となります。「羽衣」に用いる面は、気品ただよう女神や天女を表現した「増女」です。能の装束は、蚕という蛾の幼虫が繭をつくるために出した糸からつくられた「絹糸」で作られています。若い女性役には紅色の入った装束・年をとった女の人の役には紅色が入ってはいけないという決まりがあり、それを「紅入」「紅無」という表現で表しています。

今回はまず、狂言「梟山伏」を鑑賞します。とても面白いお話ですので、昔の人たちが狂言を観て笑ったように、皆さんも楽しい気持ちになったりおかしく感じたり、どうぞたくさん笑ってください。狂言が終わると、「橋掛り」という長い廊下の奥、虹のような五色の「揚幕」の向こうにある「鏡ノ間」というお部屋から、楽器の音の具合を整える「お調べ」の音が聞こえてきます。これがお能の始まりの合図です。お友達とのおしゃべりも、お能が終わるまでお休みです。

さて、お能の終わりはいつでしょう。天女が揚幕の向こうへ消えた時ではなく、最初と同じように舞台上（橋掛りも含む）から誰もいなくなった時、それがお能の終わりです。その時、舞台の上に現れた三保の松原の浜辺、天女が空高く飛んでいった富士山などの昔のお話の世界から、今いる自分の世界にもどって大きな拍手をいたしましょう。その時、天女や漁師など昔の物語の世界の人物から、私たちと同じ現代人にもどった能楽師（能楽の役者）の方々も、皆さんの盛大な拍手を嬉しくお聞きになるでしょう。

2012年「わたしたちの能楽教室テキストより」(梅若研能会)



2012年度に開催された、第32回「夏休み親と子の能楽教室」の「事前学習風景・能楽鑑賞風景」をご紹介します。

### 【事前学習風景】（池袋会場にて）

講師 柏山聡子（能楽師）



1

事前学習のはじまりです

お能の始まる合図：今日の調子を調べているので、「お調べ」といいます。

お調べの音が聴こえてきたら3つの約束を守って鑑賞しましょう！

1. お口を閉じる
2. 手はきちっとそろえて膝の上
3. 背筋をピンとのばす



2

講師の先生の笛といっしょに唱歌の練習です。



3

スライドを使って舞台の様子をみながら、わかりやすく説明します。



4

みんなで「羽衣」にそっと触れてみましょう。



舞台上で使用される“面”や装束の展示を見ることができます。



実際に面をつけるとどのくらい見えるか体験です。

【能楽鑑賞当日風景】(千駄ヶ谷国立能楽堂にて)

演目

能 『羽衣』 梅若万三郎 他

狂言 『泉山伏』 野村 万蔵 他



能鑑賞の会場です。



鑑賞のマナーの最終チェックです。



いよいよ会場入りです。



スタッフのみなさんが、丁寧に生徒さんの席を誘導します。



さあ！本番の始まりです。教えていただいたマナーを守って鑑賞しましょう！

## 梅若研能会

梅若万三郎

公益財団法人梅若研能会理事長。重要無形文化財総合指定保持者。

2001年、3世梅若万三郎を襲名。

1941年2月11日、2世梅若万三郎の長男として誕生。

1944年、初舞台を踏んで以来今日まで、東京はもとより、地方・海外での公演に意欲的な姿勢を見せ、能楽界の第一線で活躍している。

1989年、ベルギーにおけるユーロバリア日本祭、

1991年イギリスでのジャパン・フェスティバル、

1999年「ドイツにおける日本年」記念ベルリン能公演、等の海外公演に団長として参加、その責務を果す。

### ◆梅若研能会の活動

梅若研能会は東京都内で開かれる月例公演や別会公演の他にも、優れた舞台を東京以外の地や、海外に紹介する事業をいたしております。その為、皆様のすぐ傍で、能を上演致したく考えております。能はふつう「能楽堂」という定まった空間で上演されます。しかしそれは近年のこと。昔は芝生や土の上でさえ舞われた事もあります。そんな能のエネルギーを甦生させる為にも、またいろいろな形で多くの方々と新しく出会う為にも、研能会は会場を限定いたしません。今日、地方・海外公演のほとんどは、寺社の境内や多目的ホールなどに 仮設された能舞台上で上演され成功をおさめています。空間は無限であり、そこで演じられる能は、舞台構造や言葉の違いを超えて、皆さんの心にダイレクトに訴えかけられる、と信じています。それは、能が六百年間以上の歳月を生き続け、さらに現代ではもっとも前衛的で、もっとも歴史のある演劇として海外からも注目されている事実からもわかり戴けると推察いたします。どんな事でもお気軽にご相談下さい。それによって、皆様と私ども研能会との出会いの瞬間が、永遠の美との 出会いに変わることでしょう。

### 《夏休み親子の能楽教室》

主催・お問い合わせ先【公益財団法人 梅若研能会】

〒151-0066 東京都渋谷区西原1-4-2梅若研能会事務局

E-mail:staff@umewakakenohkai.com

梅若研能会ホームページ▶<http://www.umewakakenohkai.com/>

### 取材を終えて

日本の伝統芸能である能楽の世界は非常に奥深いものがある。鑑賞するにはクラシックの演奏会とは異なり、ある程度の予備知識を必要とする。今回の企画は、基本的に親子で参加し、まず「事前学習」で鑑賞のための予備知識（演目のあらすじや鑑賞のマナーなど）を習得してから、国立能楽堂にて鑑賞をするというもの。「事前学習」では専門講師が子どもたちにも非常に分かりやすい説明で勉強会が進められた。教育の一貫の意味もあって親子別々の教室にて「事前学習」が行われ、また当日の「能楽鑑賞」においても親子別々の席が用意されていた。スタッフの子どもたちへのサポートも万全で、安心して参加することができる企画であると感じた。子どもたちも、親から離れ両日ともに真剣に取り組んでいた様子が印象的であった。今年開催される第33回《夏休み親子の能楽教室》も非常に楽しみである。

連載④



## 箏を使う授業の実践 その3

### はじめに

前々回は、初めて箏に触れる児童・生徒を対象として「さくらさくら」の二部合奏を紹介し、今回はそれを踏まえて「夏の思い出」の二部合奏を紹介しました。筆者が体験している品川区の小・中学校の場合は、一面の箏を二人交替し、3時間ほぼ連続して実施しています。

このように3時間連続して体験できる環境は非常に恵まれていると思います。品川区の場合は教育委員会が主導し、全小・中学校に要請しているので可能になっています。しかも、箏は教育委員会と和楽器店との年間契約により、レンタル方式で実施しています。箏の搬入、搬出は和楽器店が責任をもって担当しています。筆者は教材原稿を1～2週間前に各学校に郵送し、当日は手ぶらで学校に行けばよいので大変効率的な方法で実施しています。

このように恵まれた環境で実施できるのは、多分日本中で品川区のみではないでしょうか。

筆者はそのような事情を児童・生徒に説明し、「君たちは大変幸せな所で勉強しているのだよ!」と、話しかけながら指導しています。正直に言って、このような方式を全国的に展開できないものかと願っています。

第一回でも触れましたが、平成11年度から18年度までNPO法人「邦楽教育振興会」の理事兼事務局長を務めました。全国組織のNPOで、全県に会員が居り、六百数十名の会員で運営していました。約60%が小・中学校の先生、約20%が邦楽の師匠、約10%が邦楽器店のオーナー、約10%はその他邦楽に関心をお持ちの方々という構成でした。(19年度をもって解散)隔月発行の会報には全国の会員から寄せられた邦楽教育の実情を掲載していました。筆者はその編集・発行の実務を一人で担当していましたので、各地の実情をリアルタイムで把握することができました。

今回は以上のような体験を基に、教育環境をどのように整えたらよいか?等を含めて述べてみたいと思っています。

### 楽器をどうするか

どこの自治体も財政難で困っている時代なので、一挙に楽器を整えることは望むべくもないでしょう。学校の子算で少しずつでも購入し、何年かかけて揃えてゆくのが最も現実的であろうと思います。例えば、現在充実している吹奏楽の楽器にしても一挙に整ったわけではありません。数年か十数年掛けて現在のような充実を見るに至ったはずです。音楽の先生方の情熱と交渉力

を大いに発揮し、校長先生のご理解を頂きたいものと願っています。筆者の知り合いの先生の中にはそのような方法で毎年1～2面ずつ買い足している方がいらっしゃいます。

次に一般家庭で使わなくなった箏が眠っている場合があり、それを提供していただく方法があります。筆者が理事をしていたNPOでは200面以上の箏を所有していました。その殆どは無償で提供していただいた物でした。NPOの名を使うと新聞等でも記事の掲載が可能でした。最も実効性が高いのは学校の情報誌で地域の方々に呼び掛けることでしょうか。この方法で少しずつ増やしている学校もあります。ただし、この方法は提供して下さる家まで受け取りに行く労を惜しんではなりません。(乗用車に楽々と載ります) なお、これらのケースでは爪は学校で購入しなくてはなりません。爪はサイズがいろいろありますから余分に揃えなくてはなりません。

最後に、和楽器店から借りる方法ですが、この場合は爪も含まれます。最近レンタル用の楽器を相当数整えている楽器店が増えてきました。筆者がお付き合いをしている楽器店でも100面以上の箏を準備しているところがあります。この場合は学校までの搬入・搬出は楽器店が担当し、それらを含めての借用料になります。なお、借用料はケースバイケースですので、相談してみなければなりません。



### 講師はどのように

講師の選び方は大変難しいことです。家元制度の中だけで仕事をしてきたお師匠さんで、特に年配の方は避けたほうがよろしいでしょう。教室で大勢を指導した経験がないお師匠さんでは授業が成立しなくなる事がしばしば起こります。そのようなお師匠さんの場合、教材も邦楽の古曲を取り上げる場合が多々あります。邦楽の世界では教科授業の形態で、一度に大勢を指導する方法を全く持ち合わせてはいません。お座敷での一对一の教授法のみで発展してきた世界で、それをそのまま教室に持ち込むと授業は成り立ちません。NPOの理事をしていた頃、地方からそのような報告をしばしば受けました。従って、若くて柔軟性のある先生が望ましいのです。そのような先生をどのようにして探すかについても、和楽器店と相談してみるべきでしょう。教材については音楽の先生から希望曲を提案し、箏の先生とよく相談して決めるべきでしょう。

ちなみに、文部科学省は「邦楽」を体験させなさいとは言っていません。「和楽器」を体験させなさいと言っています。そしてまた、和楽器を使って古典を教えなさいとも言っておりません。どのような曲を選ぶかは大変重要なことです。



### 選曲はどのように

初めて箏を体験する場合はやはり五音旋法の曲を選ぶべきです。どこの民族楽器でもその民族旋法と緊密に絡み合って発展してきているからです。まずは陰旋法の曲で体験するのが最もよろしいでしょう。そして、子どもたちが知っている曲を選ぶべきです。そのような観点から「さくらさくら」が最適であろうと思います。その後は、わらべ歌の中から陰旋法の

曲を選び、何曲かを体験するとよいでしょう。

次に、陽旋法の曲を体験するとよいと思います。例えば、「ソーラン節」「こきりこ節」等です。その他、子どもたち知っている民謡や教科書に掲載されている民謡を選ぶのがよろしいでしょう。なお、初めはなるべく順次進行の多い曲を選んで下さい。箏は順次進行の曲が演奏し易い楽器です。

更に先に進む場合は、七音音階の曲、すなわち長調・短調の曲を体験するとよろしいでしょう。この場合もやはり子どもたちが知っていて、順次進行の多い曲を選んで下さい。その場合、調弦法を工夫しなくてはなりません。長調・短調の曲を演奏する場合の調弦法は、その曲、その曲によってケースバイケースでいろいろな調弦法が可能です。筆者は旋律のみを演奏するのか、二部合奏として演奏するのか等によっても調弦法を変えています。

### 1. 五音旋法の場合

- 陰旋法（1をEとする） 平調子

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 斗 為 巾

- 陰旋法（1をDとする） 平調子

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 斗 為 巾

- 陽旋法（1をEとする） 民謡調子

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 斗 為 巾

- 陽旋法（1をDとする） 民謡調子

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 斗 為 巾

### 2. 七音音階の場合 (D dur)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 斗 為 巾



## 調弦の仕方等

箏の授業はその準備に相当の手間がかかります。

まず、ケースから出し、座奏の場合は琴台を龍頭の下に敷きます。柱を立てます。最初に柱を立てるときは1の音のみ正確に合わせます。(チューナー等で) 1を甲(5と同音)とするか、乙(1オクターブ低い)とするかを確認する。そして2~巾の柱はアラ(荒・大雑把)に立てます。その場合箏の中心より右より(龍角より)に斜めに立てます。

箏の面数が多いと、ここまですを音楽教師が一人で行うのは相当大変です。品川区の先生方は音楽部・吹奏楽部等の部員に手伝ってもらっています。児童・生徒たちは喜んで協力しているようです。

全ての柱を立て終わったら、最初に合わせた1の音と5の音を同音、又は1オクターブに合わせます。(以下は1を乙とした場合を前提に説明する)次に2と5を完全5度に合わせます。

1と3を完全5度に合わせます。3と4を半音にします。(半音は平均律より狭く取る)

5と6を半音にします。後は2と7をオクターブに、3と8をオクターブに、以下順次オクターブに合わせてゆきます。陰旋法又は陽旋法とする場合は純正律で調弦しますから、ピアノ等で一弦一弦を合わせないで下さい。そして完全5度、完全8度の響きを聴き分ける訓練をして下さい。

なお、柱を移動するときは必ず柱の両脚の間に左手の中指か薬指を入れ、親指と人差し指で柱の上部を掴み、柱を持ち上げるようにして下さい。(柱の上部のみを持って移動すると柱が倒れます)

筆者は1分で2面、つまり1面は30秒以内に合わせます。ちなみに、東京藝術大学箏専攻で受験時の実技試験は、試験官の前で調弦するところから始まります。調弦に時間がかかるとそこで既にチェックされてしまいます。



## 箏をしまう場合

連日使用するような場合は、柱を外さずそのまま壁等に立て掛けて置いて構いません。その場合、3面までは重ねても大丈夫です。4面以上は傾斜がゆるくなり危険です。なお、必ず龍頭を下にして立て掛けて下さい。龍尾は丸くなっているのが不安定で倒れる恐れがあります。数日以上使用しない場合は、柱を外してケースに収めて下さい。柱を外すときは右手で弦を持ち上げ、左手で柱を外します。(弦を持ち上げずに外すと柱が倒れます) 因みに、児童・生徒に手伝ってもらおうと、大喜びで協力してくれます。

ケースに収めた箏は壁等に立て掛けても、床に置いても構いません。この場合も3面位は重ねても大丈夫です。

# 「音楽の真実」を求めて

連載  
第3回

——時空を越えるウィーン旅行記

横浜国立大学 茂木 一衛



前号でのあらすじ

時は22世紀。悠美は地球と月の間に浮かぶスペースコロニー生まれ、拙著《音楽宇宙論への招待》から抜け出してきたヒロイン。芸術音楽の将来を憂い、その原点—音楽の真実—を求め地球上の音楽の都ウィーンを訪れます。

「音楽について真剣に思えば思うほど、何か人間を越えた存在？を感じてしまう。」

シューベルトの史跡に身を置いた後、モーツァルト《レクイエム》の深遠な響きを思ったとき、それが悠美の実感でした。もっとも彼女は最初、「天の声？」<sup>1</sup>から知らされていました。…まず目の前の演奏の現実を越えてその奥にある、その音楽を生み出した人、つまり作曲者の精神に思いを馳せねば、と。…だが今、悠美の心は作曲者をさえ越えてさらにその先へと向かっていたのでした。…

## 「根源的な出来事」へ

「たとえばシューベルトの名作《未完成交響曲》の神秘で奥深い響きに接すると、響きを越えて、たまらなくロマンティックな世界へと心が誘われる。現実の鳴り響きを越え、形容しようとする言葉を失わせ、立ち上がれなくなるほどの感動をもたらす世界へ…。それはもう人間業を越えた世界ではないかしら。…そのような世界はたしかに感じ取れる。…」

悠美は自らの心に問いかける。

「そのような世界の存在について、昔の直感性に優れた人たちは気付いていたのではないだろうか。たとえば古代ギリシャの哲学者プラトン<sup>2</sup>や中世の思想家ボエティウス<sup>3</sup>の言う『宇宙の音楽』はそんな存在への確信から生まれたものではないかしら。…」

「悠美さん、悠美。」

難しい顔をして考え込んでいた悠美は、光介の声で我に帰る。いつのまにか悠美は意識だけでなく体もシュテファン大聖堂の裏手に来ていた。観光客相手のフィアカー（馬車）が何台も、すぐ横の聖堂裏の広場に行儀よく並んでいる。彼女の脇に立つ光介が、悠美の思考過程を見透かしたかのように言う。

<sup>1</sup> 拙著《音楽宇宙論への招待》（春秋社）中では「光の使者」として登場する。

<sup>2</sup> プラトン（紀元前427～紀元前347）《国家 下》（藤沢令夫訳、岩波文庫）の第10巻で、戦士エルの死後の物語として、宇宙の音楽がリアルに語られる。

<sup>3</sup> ボエティウス（480頃～525）は、音楽（ムシカ musica）を次の三つに分類する。\*宇宙、天体の音楽（ムシカ・ムンダーナ——宇宙の調和のことなど、言わば聞こえない音楽で、これが最も根源的な音楽）、\*人間の音楽（ムシカ・フマーナ——前者の人間版、精神と肉体の調和などで、やはり聞こえない）、\*器官の音楽（ムシカ・インストゥルメンタリス——鳴り響く音楽で、これが現代人の言う音楽に最も近い概念）

「悠美さん、あなたが思う『響きの背後の世界』は、実際の響きから垣間見ることができるよ。」「え！それはどんな風に？」

「たとえば倍音さ。ほら、強く低音や低声を発したときに、高い音域で自然に聞こえてくる、あの倍音、あの中には三和音や四和音などがすでに含まれている。ご存じのようにそれらの和音はヨーロッパ起源の音楽の基礎になっている和音だ。だからルネッサンス時代から20世紀初めまでおよそ500年も続いた機能と声法による作曲の仕事とは、そんな自然界の響きを意識化し顕在化させたこととさえ言えるだろう。作曲家たちの作品の華麗で複雑な響きの源は、自然界の中に簡潔な形で最初から存在していた。それらは自然界の中で何と美しく、すでにして鳴り出していることだろう！我々はこの上なく簡潔な美の中に、響きを越えた根源的な世界の存在を垣間見る思いがする…。美学者が「存在の恵み」と言った美は、人間が生み出す前に、人間の意図と関わりなく不思議にも自然の中に存在していた。…その響きの根源に遡って『源』を探ろうじゃないか。響きをも超越した世界を」

悠美は光介のそんな言葉を聴いて、急にこの青年が頼もしく感じられてきた。

「…彼とともに、そんな『源』まで行ってみたい…」

と同時に、悠美は月面上の太陽系連合大学での講義で聴いた内容を思い出した。それはE.クルトという学者の言葉だった。

——音楽において現実に鳴り響いているものは全て、それより遥かに力強い根源的な出来事から高く放射されたものに過ぎない——<sup>4</sup>

「聞こえる音楽の先に根源的な出来事がある。…『鳴り響き』って、現世を成り立たせている出来事の反映なのかしら」

悠美は、自分が学び教えている音楽の世界が何と奥深いものか、その本質がわずかに、しかし確実に見えた気がして、思わず身震いする。

## 天球としてのグローブ

曇みかけるように光介が口を開く

「そうだ、このウィーンにも自然界の、いや宇宙の音楽の根源を考えるのに相応しい場所がある。」「それはどこ？」

「あまり知られていないけれど、グローブミュージアム」「地球儀博物館？」

「うん、グローブ（Globe）というとは普通は地球儀ばかり思い起こすけれど、グローブは球体とか球儀のことで、ウィーンそのミュージアムは地球儀天球儀博物館と言ったほうが、より正確かな。旅行ガイドブックなどにもほとんど紹介されていない珍しい博物館で、地球儀と並んでたくさんの天球儀も収蔵されている。恒星や星座の位置を球面に描きこんだ天球儀も。…かつて世界中に領土を持ち太陽の沈まない国と言われたハプスブルク帝国の伝統を受け継いで、世界全体、いや宇宙全体をも視野に入れた壮大なコレクションだ」

「そう、行ってみたいな」「では、さっそく」

二人は、繁華街グラーベンを抜け、悠美が昨日、おいしいケーキを食べたデメル店を右横に見つつコルマルクト通りを過ぎミヒヤエル広場に出て、モラル宮殿の中のその博物館に向かう。めざす館は、静かで落ち着いた道のヘレンガッセ沿いにあった。

建物の一角を占めるその博物館に足を踏み入ると、沢山のグローブに圧倒される。地球儀と天球儀が対になって展示されているものも多い。

<sup>4</sup> Ernst Kurth: Romantische Harmonik und ihre Krise in Wagners 'Tristan'. (ロマン派の和声法とワーグナーの《トリスタン》におけるその危機), Georg Olms Hildesheim, S.1 クルトは20世紀前半、エネルギー説の代表的な音楽美学者。

「仲良くペアになって展示されているわね」「ああ、…僕たちもペアかな…」

二人はどちらからともなく手をつなぎ、連れ立って、様々な世界の縮図の間をそぞろ歩く。世界を掌中にした皇帝、皇妃になったような気分で。

「ウィーンは世界帝国の首都だった。地球も天球も包括したこの世の成り立ちを考える壮大な世界観、宇宙観も形成されたに違いないわ。この地に暮らした音楽家たちの精神もそのような世界観、宇宙観を前提に考えなくちゃ…」

悠美のそんな思いを裏付けるような言葉を光介が口にする。

「ベートーヴェンは第9交響曲を発想し始めた頃、哲学者カントの宇宙論、太陽系の生成論を熟読している。解釈の仕方によってはこの交響曲は楽聖の宇宙論とさえ見なせるんだ。第4楽章で使われたシラーの頌詩も、それにベートーヴェンが付けた雄大な音楽も、宇宙的だよね…『星空の彼方に愛する父は住むに違いない』…もうほとんど耳が聞こえなくなっていた楽聖は、心の耳でスコアの奥の、聞こえない『根源的出来事』を譜に定着させようとしたのかも知れない」

「同じ時期にベートーヴェンが《莊嚴ミサ曲》の譜に書きつけた「心から心へ」という言葉も、聞こえない音楽の本質が、人類愛的な心の通い合いを通じて、楽聖から、そして人から人へ直接に伝わるようにとの願いだったのかも知れないわね」

悠美の心には、第9交響曲や《莊嚴ミサ曲》を作曲した当時のベートーヴェンの様子が、まるで彼女が楽聖と話しているかのように生き生きと、なぜかほとんどデジャヴュ（既視感）があるかのように思い起こされた。<sup>5</sup>

## ウィーンを離れ宇宙へ

「さて、そろそろ時が満ちたようだ」「どうということ？」

「君も音楽の根源的な本質への手掛かりを得たようだし、ウィーンを離れて、音楽の根源を実際に宇宙に探すときが来たということ」「そう…、ちょっと名残惜しいけど…」

二人は博物館を後にして、ウィーン郊外のスペースポートに向かう。地下鉄1番に乗るとまもなく電車は地上に出てドナウ川を渡る。22世紀の今では路線はリニア化され、列車は静かで速い。幅広くゆったり流れる大河を眼下に眺め、目の前に迫りくる未来的な国連都市（今では太陽系連合都市と言うべき）を見遣りつつ悠美は思う。

「ウィーンの音楽家たちは、過去、現在、未来が混在、あるいは隣接し、都市と自然が踵を接して存在するこの街に暮らしたからこそ、現実の響きとその奥の自然や宇宙が調和した芸術作品を生み出したのかもしれない。それは私の故郷、スペースコロニーも同じこと。何千人、何万人もが暮らすコロニーにも（人工の産物だけれど）山あり川あり街あり…、そこでも奥深い芸術が生まれるよう努力しなければ…。」

22世紀初めに建設された、国連都市の先に広がるスペースポートに着くと、二人はスペースプレーンに搭乗。プレーンは21世紀の飛行機と同じく滑走して飛び立ち、そのままシャトルとして飛翔し、地球周回軌道上のスペースステーションに到着した。地上からの高度約3万6千キロ、静止衛星軌道上に浮かび自らの回転で0.7Gの快適な人口重力を生んでいるステーション、そのトランジットルームのソファに座り光介が、意を決したように言う。

「僕たちはできればこれから、外惑星方面行きの定期航路を飛ぶ宇宙船で、木星圏に向かいたい。長い旅になるけれど、…いいかい？」「木星？」

<sup>5</sup> 実は《音楽宇宙論への招待》中で、悠美は、光介のプログラムした仮想世界の中に現れるベートーヴェンと出会い、楽聖の口から第9交響曲の本質について聞き出している。

「そう、そこでいよいよ音楽の本質と直接に出会うことになるだろう」

悠美は思う。

「そんなことをしたら、私はコロニーに戻るのが予定より大幅に遅れてしまう。…けれど、長期休暇はとってきたことだし、またとない貴重な体験をすることになるかも知れないし。それに、この青年と一緒なら…」

その旅が数年を要するどころか、永遠の、命を賭けた旅になる可能性さえあることを悠美はこのとき、まだ意識していなかった…。いや、実は本能的には感じ取っていた。同時に、音楽の未来に対する自らの重大な使命感も無意識のうちに…。

## 木星圏へ

1年後、悠美と光介を乗せた大型宇宙船は木星軌道に近づきつつあった。渦を巻く大赤班もはっきり見える巨大な木星本体、その周りに浮かぶ多くの衛星群、とりわけ四つのガリレオ衛星、イオ、エウロパ、ガニメデ、カリスト。

17世紀初め、音楽史がバロック時代に入り、アルプスの南でガリレオが望遠鏡でそれら衛星を発見した頃、アルプスの北では、惑星の運動の法則を発表したケプラーが『惑星の音階（歌）』を書いていた。各惑星の近日点と遠日点の各速度の比から算出されたというその音階は、古代以来の宇宙の音楽の思想が、ケプラーの見事な数学的処理を経てバロック期に蘇ったものだった。

それによると木星の音階は短3度音程を埋めるスケールとされるという。悠美には、地球の10倍以上の直径を持つ巨大惑星が、短3度音程を核にした雄大な音楽を奏でているように思われた。それはもちろん真空の宇宙空間では聞こえるはずもなかったが…。

しかしやがて、彼女が足を踏み入れるその木星の衛星上で、悠美は光介とともに、実際に「音楽の真実を知る根源的な存在」との邂逅を果たすことになるのだった<sup>6</sup> ……。 （完）



音楽宇宙論への招待（茂木一衛 著、春秋社）

悠美と光介が音楽の真実を求めて時空を旅する物語。光介が創った仮想世界で悠美はケプラーやベートーヴェンと出会い音楽の新しい捉え方を体験する。二人は木星圏へ旅立ち、音楽の本質を知る人？と遭遇する。古代ギリシャ以来の「宇宙の音楽」の世界観を踏まえての冒険です。



<sup>6</sup> 《音楽宇宙論への招待》中でその邂逅は実現する。拙著と当連載の物語は不即不離の関係にある。悠美と光介の出会いが拙著と連載で異なるが、木星への旅—音楽の本質との邂逅の旅—で両者は共通の流れへと収斂していく。合わせてお楽しみ頂ければ幸いである。

# 低学年～中学年から歌唱で使える 「歌声1・2・3！」

仙台市立金剛沢小学校 大槻 葉子

## 1 ● 声を知る

—自分の持つ2種類の声って？お互いの声を聴き合い、選び、使い分けましょう—

### 気持ちのいい声

※児童の発表から

“きれいで透明な声、透きとおった”  
“明るくてやさしい、響いている”  
“がさがさしていない、ふんわりする”  
“のどが全然痛くない”  
“なんかすうーっと遠くに届く感じ”  
“どこまでも高い音が出そう”  
“うまく聞こえる、男女の差がない”  
“ミッキー、お姉さん、外人っぽい声”  
“自分の声しか聞こえない”

### いやだなあと思う声

※児童の発表から

“ギャーギャーしている、ガラガラ声”  
“響かない、きたない、暗い感じ”  
“無理やり歌っていて、のどが痛い”  
“おばちゃん・おじちゃん声って感じ”  
“高い声が出しにくい、音がずっと同じになっちゃう”  
“耳をふさぎたくなる、へたに聞こえる”  
“ジャイアン、パイキンマンみたい”  
“みんなの声が聞こえる”

声を出してみる ⇒ 自分の体や聞こえ方の違いに気付く ⇒ いい声、そうでない声を探す

自分の中、自分以外にも録音機を装着！

⇒ 子供の言葉で取り上げ、その違いを共通理解 ⇒ いい声だけ！みんなでよさを共感

【活動例】“いい声まねっこリレー” “歌詞一文字リレー” “歌声変身&返信ゲーム” など

## 2 ● 体を知る

—そのためにどうするの？体がどうなるか、試みましょう。みんなできる！—

教師の言葉 ⇒ 子供に分かりやすい言葉で、いつも使うこと

教師も子供も一緒になって、実際にみんなでやってみること

- ・ほっぺにたこやき、肩を後ろに回してストン、お尻をキュッ、ドッシリ・ドシン！
- ・体を大きく、身長を高く見せて。おへそと胸の間を広げて。筋肉モリモリはだめよ。
- ・ペロを平らに、のどちんこが見えるかな？（互いに見合わせる）
- ・鼻の後ろに穴が開くよ。外人さんのように頭が前後に伸び～（手振りをつけて）。
- ・おなかに空気を入れるとふくらむよ。風船のように。（教師のおなかをさわらせる）
- ・ペロの上にジャンボたこやき、ハフハフできるすきまを。口の中の形は□な感じ。
- ・声が飛んでいくほうを見て、頭の後ろのほうから飛ばす感じで（手振りをつけて）。
- ・体ガチガチはだめ。スッと力を抜いて、足は自分の体に合わせて、感じはドシッと。
- ・ほっぺの筋肉、ブルドッグのように、ブルブルできるかな？
- ・おなかのまわりに空気の浮き輪！体ダラン（腰を折る）と背中もふくれるよ。（互いに）

【活動例】“いい顔・姿勢でハイポーズ！” “顔（目・眉・ほっぺ）の体操” “おなかの変身” など

### 3●言葉を知る（中・高学年向け）

—「歌う」という言葉は「訴う」（古語）から。「伝える」ために日本語を知る—

#### 【子音の作り方】

※イメージです。教師が知っていることが大事。  
実際に教師がやって見せながらどこを使っているか意識して。

- カ、ハ行 → のどの奥をこすって
- サ行、チ、ツ → 前歯の後ろに息をぶつけて
- タ、テ、ト → 舌をはじいて上あごにつけて
- ナ行 → 鼻の奥と舌、言葉の最初に n（ン）を入れて
- マ、バ、パ行 → 上下の唇を一度つけてスイカの種を飛ばす感じで
- ヤ行 → 小さく i（イ）を入れる
- ラ行 → 舌の先を丸めて上あごをはじいて
- ワとヲ → 小さく u（ウ）を入れる
- ン → 半開きにして舌を上歯ぐきにつける、舌は下歯ぐきにつけて（他の方法も）
- ガ行 → 濁音はのどの奥で、鼻濁音は鼻の奥で。＊聞こえる音の違いも聴き合って。
- ザ行 → サ行を濁らせて
- ダ行 → タ行を濁らせて

歌のよさは、「歌詞」があること。だからこそ、人の心を動かすことができる。

～言葉、詩を、声に出して読みましょう～

～どう読んだら伝わるか、みんなであれこれ試みましょう～

～母音と子音の使い方、言葉のニュアンスをつくりましょう～

#### 【母音の注意点】

※発声しながら、手や体も使いながら。声を聴き合って。

- ア … 横開きしすぎず、まあるく。頭の上へ飛ばすイメージ。
- イ … エのように、横開きしすぎず。上へ飛ばすイメージ。
- ウ … オよりまあるく。唇を突き出しすぎずに、真ん中ぐらいの遠くへ。
- エ … アのように。二番目に遠くへ飛ばす。頬をつぶさず、舌を上げず（難！）。
- オ … 一番遠くへ飛ばす。声を引かない。唇のまわりの筋肉を縦に集めて。

【活動例】“あなたも名朗読アナウンサー” “言葉イケメン・言葉美人をさがせ” “母音飛ばし名人” など

【自己・相互評価に…】

- ・歌声チェックカード…ポイントレッスン…声・体・日本語。歌唱の授業導入で。
- ・歌えたよカード…最後まで歌えた時に、スコア集のように。レパートリーを増やす。
- ・見つけたよカード…曲想や歌い方のポイント、気づきを記入するメイキングスコア。  
⇒ これらをファイリングし、使い方に慣れさせ、いつでも一人で使えるようにすること  
教師のコメント。励ましやアドバイス。いいものやがんばりを紹介しましょう。

# ガク リョク 楽力 (学力) アップ

充実した鑑賞指導を目指して  
—基本的な考え方と教材研究のポイント— (後編)

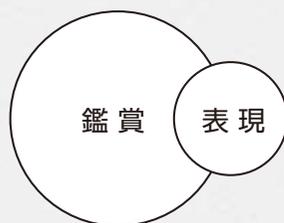
福岡教育大学教授 木村 次宏

**音** 楽鑑賞は、子どもたちが幅広い音楽に興味や関心をもって聴くことの楽しさや喜びを体験し、美しいものに感動するといった柔らかな感性をはぐくむための基盤となる活動であり、今後、充実した鑑賞指導の取り組みをさらに積極的に進めていくことが期待されています。前回(2012年秋号)は、充実した鑑賞指導を目指すための基本的な考え方及び低学年における教材研究のポイントについて述べましたが(詳細については秋号をご参照下さい)、今回はその続きとして、中学年及び高学年の教材研究のポイントについて述べたいと思います。

## ◆ 中学年: 表現と鑑賞の活動の関連化を図る

### ○ 『サウンド オブ ミュージック』より (リチャード・ロジャーズ作曲)

『サウンド オブ ミュージック』は、リチャード・ロジャーズによって作曲されたミュージカルですが、後にジュリー・アンドリュース主演によって映画化され、世界中の人々に親しまれるようになりました。教科書ではその中からオープニングの「サウンド オブ ミュージック」をはじめとして、「ドレミの歌」、「ひとりぼっちのひつじかい」、「エーデルワイス」などを取り上げて鑑賞します。そこではまず『サウンド オブ ミュージック』の物語について知り、そして映像を鑑賞しながら各曲が歌われる場面ごとの楽曲の特徴を感じ取り、ミュージカルの楽しさに触れることができるように、【図2】に示した通り鑑賞活動の中に表現活動を取り入れることによって、鑑賞と表現の活動の有機的な関連化を図り、音楽との一体感を味わいながら楽しい学習活動を展開するようにします。



【図2】 鑑賞活動が主となる場合の表現活動との関連的な学習

なおここでの表現活動はあくまで鑑賞活動を能動的なものとし、聴く喜びを深めるための一つの方法として取り入れるものですが、例えば次のような活動が考えられます。

「ドレミの歌」— 3年生ですでに歌唱教材として学習しているので、一緒に口ずさんだり、“ド・レ・ミ”の掛け声をかけたりしながら楽しく聴く。

「ひとりぼっちのひつじかい」— ヨーデルの声の出し方をまねしたり、人形を操るまねをしたり、拍子をとりながら聴く。

「エーデルワイス」— 3拍子の拍の流れにのって、トラップ大佐の気持ちになって口ずさむ。この曲はトラップ大佐によって二つの場面（自宅で子どもたちや客人に対してやさしく歌われるところと、トラップ一家の亡命直前の緊迫した雰囲気の中で歌われるところ）があるので、映画の中でのそれぞれの場面の様子の違いを感じ取りながら視聴する（なお「エーデルワイス」は、教科書では次の題材で表現教材としても取り扱われるので、ここでの取り扱い方はそのことを考慮しておくことも必要です）。

ミュージカルや歌劇のような音楽は、やはり大画面で高音質の音源で視聴できるように、教室環境を整備することも重要なポイントです。大型モニターやスクリーンに投影された映像とステレオ音声によって臨場感あふれる音楽鑑賞を楽しんでみましょう。また市販されている『サウンド オブ ミュージック』のDVDには特典映像なども収録されており、それらも教材研究の資料として大変参考になると思います。文献の『サウンド オブ ミュージックの世界 —トラップ一家の歩んだ道—（求龍堂 1995）』では、実在したトラップ一家の足跡を辿りながら、彼らが実際に活動した記録が貴重な写真とともに紹介されています。その中ではトラップ一家がリコーダーを世の中に普及させた功績についても記されています。さらに映画のパンフレットなども見てみると、それぞれの場面の写真や登場人物についての情報がたくさん掲載されています。これらの資料を見ているだけでも、「聴いてみたい、見てみたい！」と、興味がわいてくると思います。

## ◆ 高学年：同じ作品による音楽表現の違いを聴き比べる

○『星とたんぽぽ』 作詞：金子みすゞ 作曲：中田喜直、新実徳英

この教材は、大正時代末期から昭和初期にかけて活躍した夭折の童謡詩人金子みすゞ（1903～1930）の詩『星とたんぽぽ』に曲がつけられたものですが、教科書ではこの詩に中田喜直氏と新実徳英氏の二人の作曲家によって書かれた作品を聴き比べることを通して、同じ詩につけられたそれぞれの音楽表現のよさや美しさを味わうことを主なねらいとしています。それぞれの楽曲の主な特徴は【表3】に示した通りですが、ここでは(1)情景を思い浮かべながら詩を朗読する（気付いたことを学習プリントにまとめる）、(2)情景

を思い浮かべながら曲全体を聴く（朗読で印象に残ったところがどのように歌われていたかを記録する）、(3)それぞれの曲の旋律の特徴を味わって聴く（感じたことを記録したり、発表したりして感じ方を共有する）、という授業の流れの中で、歌詞（詩）と曲想と音楽を特徴付けている要素（ここでは旋律、音色）のかかわり合いの違いについて聴き取り、それぞれの音楽のよさや美しさなどを感じ取るようにすることが重要です。そして「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」というこの詩の最後の節に向けて、どのように音楽が効果的に構成されているのかを感じ取り、それを学習プリントや板書などを工夫して理解を深めることによって、より楽しく充実した鑑賞活動を進めることができると思います。

【表3】二つの楽曲の主な特徴

	中田喜直	新実徳英
調性	へ長調	ホ長調（途中で転調あり）
拍子	4分の4拍子	8分の6拍子
速度	♩=80ぐらい 自由に	♩=ca44（約44）
形式	有節歌曲	有節歌曲
曲調	シンコペーションや小節の頭の8分休符などにより、詩のもつ七五調のリズムがうまく生かされている。強弱は <i>mp</i> から <i>mf</i> までの繊細で優美な変化によって表現が工夫されている。最後のフレーズが第3音で終止しており、内面に秘められた思いが暗示されているような感じがする。	ピアノ伴奏左手の16分音符を中心とした分散和音の流れにのって、8分の6拍子独特のゆったりとした旋律が歌われる。強弱は中田氏と同様に、 <i>mp</i> から <i>mf</i> までの変化によって表現が工夫されている。最後の3小節のハミングがほのかな余韻を漂わせながら静かに曲を締めくくる。

なおこの詩『星とたんぽぽ』は、さらに複数の作曲家によっても曲がつけられています。このように一つの詩に複数の作曲家によって作曲されているものも少なくありません。例えばゲーテの詩『魔王』にはシューベルトやライヒャルト、レーヴェなど、同じくゲーテの『野ばら』にはシューベルトとウェルナー、日本でも北原白秋の『砂山』には山田耕筰と中山晋平の二人が作曲しています。このように、それぞれの曲を聴き比べるという活動は、興味をもって楽しく鑑賞するための効果的な方法の一つと言えます。また聴き比べに関しては、ベートーヴェンの『交響曲第5番「運命」』のように、同じ曲の演奏による表現の違いを聴き取りながら鑑賞する教材もあります。この場合には、曲の感じや演奏速

度などが異なっている比較しやすい音源を選択するよう留意することが必要です。教科書には、ヘルベルト・フォン・カラヤン、小澤征爾、カール・ベームの三人の名指揮者の写真が掲載されており、彼らの演奏が鑑賞CDに収録されていますが、これ以外にも最近ではグスターヴォ・ドゥダメル（現在注目の若手指揮者）やロジャー・ノリントン（古典派の時代様式による演奏）など特徴ある演奏も数多く録音されているので、演奏の違いをまずは教師がいくつか聴き比べてみて、授業のめあてに合った音源を選択することが重要です。それと『運命』に関しては、児童に第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのパートをそれぞれ鍵盤ハーモニカで演奏させて、指揮者役とオーケストラ役になって“『運命』の演奏にチャレンジ”してみるのもオススメです（表現と鑑賞の活動の関連化）。うまくいっても、うまくいなくても、とても楽しい体験的なアプローチになりますし、まとめとしてもう一度視聴する時に、集中して鑑賞することができるようになります。

以上、前回（2012年秋号）と今回の二回にわたって音楽鑑賞の基本的な考え方や教材研究のポイントについて述べてきましたが、やはりまずは教師が教材となる楽曲に対して様々な視点から分析・検討し、その曲に親しんだりよく知ることが楽しく充実した鑑賞指導を目指すための第一歩となるのではないのでしょうか。これからもこのような情報交流の場を通して悩みやアイデアなどを共有しながら、実りのある音楽鑑賞の授業づくりに向けて頑張っていきましょう。



#### 【参考文献】

木村次宏「小学校教師の音楽科学習指導に対する意識」『福岡教育大学紀要』第47号 第5分冊 pp.1-13, 1998

文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』, 平成20年8月

坪能由紀子・伊野義博編著『小学校学習指導要領の解説と展開 音楽編』教育出版, 2008

三善 晃監修『小学音楽 音楽のおくりもの』平成23年版音楽科教科書 教育出版



第11回

# 地球となかよしメッセージ

作品募集(2013年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。



応募者全員に  
参加賞が  
もらえるよ!



2012  
入選作品

## 信友

運動会で私たち6年は、組体操をやりました。その中の2人技、「サボテン」は雨のせいでグラウンドがベチョベチョだったので、やりにくく失敗する人たちがたくさんいました。

私の場所もやりにくく、上の子が「もう落としていいよ。」と言ってくれましたが、小学校生活最後の運動会だったので、絶対成功させたくて、「大丈夫。まかせて!」と言うと、上の子は「分かった。」と言ってくれました。その言葉がとてうれしくてうれしくてたまりませんでした。まるで、「信じてる。」と言ってくださるようでした。

そのしゅん間、「サボテン」は成功しました。

**応募資格** 小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)

**応募期間** 2013年7月1日～9月30日  
詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。

**作品  
テーマ**

- ①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境や生き物を守るための取り組み
- ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交流、国際理解に関すること
- ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会  
◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞  
\*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>



教育出版

「地球となかよし」事務局 TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

小学音楽通信 Spire\_M [2013年 春号] 2013年3月29日 発行

表紙写真: ©JTB フォト

編集: 教育出版株式会社編集局 発行: 教育出版株式会社 代表者: 小林一光  
印刷: 大日本印刷株式会社 発行所: 教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10 電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)  
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



## なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- 北海道支社** 〒060-0003 札幌市中央区北三条西 3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F  
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
- 函館営業所** 〒040-0011 函館市本町 6-7 函館第一生命ビルディング 3F  
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
- 東北支社** 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F  
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
- 中部支社** 〒460-0011 名古屋市中区大須 4-10-40 カジウラテックスビル 5F  
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
- 関西支社** 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町 1-6-27 ヨシカワビル 7F  
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
- 中国支社** 〒730-0051 広島市中区大手町 3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F  
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
- 四国支社** 〒790-0004 松山市大街道 3-6-1 岡崎産業ビル 5F  
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
- 九州支社** 〒812-0007 福岡市博多区東比恵 2-11-30 クレセント東福岡 E 室  
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
- 沖縄営業所** 〒901-0155 那覇市金城 3-8-9 一粒ビル 3F  
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411